
赤き侍

三軒茶屋 宗次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤き侍

【Nコード】

N6310A

【作者名】

三軒茶屋 宗次郎

【あらすじ】

事故により3年間意識がなかった主人公は事故の影響で『目』を
てにいれる。『目』を駆使し、日本を再び幕末の混乱の世に導く。

プロローグ

僕は神を信じない。

それは、僕が神になるからだ。

これは、西暦3582年の日本での話し。

日本は今と大して変わっていない。

しかし、国家の力はずっと強くなっていた。

現在

目をあけた

そこには白い壁、白い布、右手には点滴と名前のしらない機械、それと花瓶に入れられた少しばかり萎れた花がある。

とっさには自分が何故ここにいるのか分からずにたたずんでいたが、しばらくすると自分のおかれている状況がわかってきた。

「ここは病院か…」

「俺は助かったのか…」

そうつぶやいた。そしてベッドから反対側を見ると窓があり、外の天気は事故が起きた日と同じように雨が降っている。外を眺めていると、ドアの外の廊下からコツコツと足音がだんだんと部屋に近付いてくるのが聞こえてくる。足音の人物は部屋の前で止まりドアノブを回す。

ガチャ

そこには白衣に身をつつんだ看護婦がいる。花を持っているところからどうやら花瓶の花を替えに来たらしい。

彼女がドアを閉めこちらに向き直った瞬間目が彼女とあい、彼女の目は大きく開かれ手に持っていた花を落とした。花が床に落ちた音で彼女は我に返り『先生〜』と叫びながら廊下を駆けていった。

どうやら彼女は静かにするという病院のルールが分からないらしい。そんなふうに考えていると今度はドタドタ走っている音が廊下から

聞こえてくる。ドアが勢いよく開くとさっきの彼女と隣には少し腹がでている医者がたっている。さっきの反応といいこの医者といい単なる事故に巻き込まれたとは違う雰囲気には俺は「どうしたんですか？」と尋ねた。

『慎也君が目が覚めたって聞いたから』

そう医者は息を切らせながら言った。

「それにしても慌てすぎじゃないですか？」

彼の返答は自分が想像出来る範囲から逸脱していた。

『君は丸3年間意識がなかったんだ…』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6310a/>

赤き侍

2010年12月16日15時41分発行